

論文の和文要旨	
論文 題目	北インド・ムスリム社会における サイヤドの人類学的研究
氏名	小牧 幸代

預言者ムハンマドに対する崇敬の念は、いつの時代のどのムスリム社会においても集合的または個人的に様々な仕方で表現されてきた。預言者によって「遺されたもの」、すなわち彼の「言行」「遺品」「子孫」をバラカ（神の祝福の力）の媒体とみなす信仰や儀礼は、それゆえに歴史的・地理的条件の違いにかかわらず、ムスリム社会の各地で見出されるのである。

本論文の目的は、預言者の「子孫」であることを主張するムスリム・カテゴリー、サイヤドが、北インド・ムスリム社会においてどのような位置を占め、いかなる役割を期待され、また果たしているかを人類学的な観点から明らかにすることにある。具体的には、ウッタル・プラデーシュ州西部のムスリムが多数派の町、C町で観察された諸カテゴリー／集団間の地位・職業・贈与をめぐる儀礼的・社会的な関係に関する事例を、サイヤドに焦点をあてて記述・分析する。その際、南アジアに固有の問題とされる「ムスリム・カースト」論を批判的に検討し、北アフリカを中心とするムスリム「聖者」論の成果を援用することで、サイヤドという切り口からムスリムにとっての序列や聖性について考察することの重要性を示す。

言うまでもなく、カーストの上下序列的なイデオロギーとイスラームの平等主義的なエートスは、互いに相容れない性質のものである。しかし、南アジアの人類学的・社会学的研究は、ヒンドゥー社会と同じように、ムスリム社会が序列化された多数の内婚的な集団で構成される様子を報告してきた。確かに、南アジアのムスリム社会には、同一地域のヒンドゥー社会との類似点が多い。だが、これまでの研究では、ヒンドゥーのカースト的な慣行の影響を受けた特殊なムスリム社会という側面が、過度に強調される傾向にあったのではないだろうか。そこではアイケルマンが提唱した「世界宗教としてのイスラームを普遍的なイデオロギー的な力としてと同時に、豊かなローカルな表現において理解すること」という人類学的イスラーム研究の課題のうち、「豊かなローカルな表現」ばかりが目されてきたと言えないだろうか。

言い換えれば、南アジアにおけるイスラームの「豊かなローカルな表現」は非イスラーム的なものと捉えられ、背後にある「普遍的なイデオロギー的な力」には相応の関心が払われずにきたのである。その「普遍的なイデオロギー的な力」とは預言者に対する崇敬の念であり、その延長としての「子孫」すなわちサイヤドを重用する社会的態度である。北インド・ムスリム社会のカースト的ないしは非イスラーム的だとされてきた諸慣行を、サイヤドに体现された「普遍的なイデオロギー的な力」との関連で読み解く作業が、本論文の課題である。そのため、第1章序論で上記のような問題提起をしたのち、次のような手順で議論を展開する。

第2章では、筆者の調査地 C 町の歴史的・地理的・政治経済的な背景、町の空間構成・住民構成、町と村の関係に関する説明をとおして、特定の家系に属するサイヤドが、町の政治経済領域や空間配置の面で、支配的で中心的な位置を占める存在であることを示す。

続く第3章以下は二部構成をとっており、第5章までの3つの章が第I部「ザート／ビラーダリー関係の諸相」に含まれる。第3章では、C 町のムスリム社会が、「外国起源」を主張する上位の3つの地位カテゴリー（＝ザート）と、インド起源の改宗ムスリムだとされる下位の19の地位集団（＝ビラーダリー）という具合に、上下に二分されていることを示す。ここでは、サイヤドを頂点とし、同胞を序列化する階層的なムスリム社会の様子が明示される一方で、不浄な職業に従事する「不可触民」をヒンドゥー社会から借用することで、ムスリム間の基本的な平等意識が保たれていることも指摘される。

第4章では、ザート／ビラーダリーの序列と差異をめぐる言説と社会慣行について述べる。C 町のムスリム社会は、ザート／ビラーダリーの区分に対応する一群の二項対立的な民俗語彙の存在によって観念的に上下に二分されているが、その区分はザート・ムスリムとビラーダリー・ムスリムが、互いに境界を創出・維持することで実現されている。主要な方法としては、①宗教・職業・集団の別に従って住み分ける傾向にある居住パターン、②相互的な訪問や冠婚葬祭における招待・参列・共食といった社会的交流の少なさ、③境界維持の最も重要な装置としての婚姻規制がある。

このように、社会生活の様々な場面で分断されているザート・ムスリムとビラーダリー・ムスリムであるが、第5章では、経済力をつけたビラーダリー・ムスリムによる、ザート・ムスリムの諸慣行の模倣を通じたザート／ビラーダリーの地位（儀礼的地位）上昇のための戦略について述べる。そこでは、サイヤドがいわゆる「上位模倣」の対象とはならない特別な存在であることが示される。

以上のようなザート・ムスリムとビラーダリー・ムスリムの間の上下序列的な関係は、前者の立場からは預言者ムハンマドとの「近しさ」または「改宗順」というイスラーム的な語法で表現され、両者の社会的断絶は前者の血統と名誉を守るためだと説明される。そうした預言者との「距離」や信仰の年季に基づく序列の論理は、もっぱら儀礼的地位に重点を置くものであり、現実の政治経済的地位が反映されないことに特徴づけられる。この儀礼的地位重視の序列の論理は、とりわけ最高位のサイヤドをめぐる贈与と奉仕の授受関係（とくにその非対称性）に顕著に現れる。そして、そこからはザート／ビラーダリーの区別よりもサイヤド／非サイヤド間の厳然たる境界線が浮かび上がるのである。

こうして、第6章から第8章までの「第II部 サイヤド～「名誉ある血統」をめぐる理念と実践」では、「聖者の子孫」・「地主」・「町長の家系」として知られる C 町の名望家であり、シーア派8代イマーム、アリー・リーダーの子孫であることを主張するリズヴィー一族の事例に基づいて、サイヤドが人々からどのような役割を期待され、また果たしているかを明らかにする。

第6章では、イランを故地とするリズヴィー一族の祖先が、いかにして C 町に到来し定着し、宗教的・政治的・経済的な力を蓄えるようになったのか、その経緯を紹介する。

第7章では、サイヤドの地位の高さや特殊性を保証する預言者に連なる血統が、いかに維持されてきたかを知るために、リズヴィー一族の婚姻パターンを参照する。ここからは、父方平行イトコ婚をはじめとする近親婚、「公募」さえ辞さないサイヤド内婚への固執、

さらに非サイヤドのザート・ムスリムとの結婚に際しては、非サイヤド女性の婚入（＝上昇婚）はよいがサイヤド女性の婚出（＝下降婚）は不吉だとする結婚観が露呈される。

第8章では、リズヴィー一族と、様々な専門的な儀礼的サービスの提供者との間の、財とサービスの授受関係について述べる。「助ける」ことと「与える」ことをサイヤドの義務と考えるリズヴィー一族は、日常的にも冠婚葬祭にあたっては、一方的な贈与者であることを理想としている。特筆すべきは、彼らは「聖者の子孫」であるにもかかわらず、聖者業で生計を立てることを忌避している（＝神との「取りなし役」という聖者の業務を実践して、報酬としての金品を受け取ることを決してしない）ことである。

一方的な贈与者たらしとするサイヤドの特殊性は、喜捨という宗教行為のうちにも見られる。サイヤドは常に喜捨の贈与者であって、その受贈者とはならない。それというのも、理論的には預言者に連なる「名誉ある血統」を通じて、彼らは生来的に多くのバラカを有しており、経済的にも恵まれていてしかるべきだからである。不運にして貧しいサイヤドは「贈与」という名目で金品を受け取るが、それにしても神の寵愛を受けた預言者の「子孫」を助けることは神を喜ばせる行為であるから、サイヤドはその贈与に対してどんな負債も負わない。それどころか、贈与者の側が現世または来世で神からの善果を期待できる積善行為となるのである。なおそのうえ、そこで使用される「贈与」という言葉にはアラビア語の「ハディヤ」が使用されるが、その語は北インドではクルアーンの代価を指す語でもある。

以上の事例を踏まえて、第9章結論では、サイヤドが預言者に遡りうる血統の保持者であり、たとえ政治経済的には劣位にあっても儀礼的地位において他のムスリム・カテゴリー／集団に優越し、聖者のような宗教の専門家でなくとも生来的に一定の宗教的機能を備えており、特定の贈与の受贈者となりえず、逆に一方的な贈与者たることを理想とする特殊なムスリム・カテゴリーであると結論づけた。

預言者ムハンマドに対する崇敬の念は、ムスリム共同体の統合要素のひとつである。彼の血統に連なるサイヤドを尊崇の対象とする態度は、ほぼ全てのムスリム社会に共通して見られるより普遍的な現象であり、決してローカルなものではない。預言者との「近しさ」の表現や預言者に「接近」する方法は、ムスリム社会の各地でそれぞれの仕方で試みられているが、北インド・ムスリム社会では、それがサイヤドを頂点とした位階制やサイヤドとの間の婚姻や贈与をめぐる関係のあり方によって表現されているのだと言える。この視点は、なぜ「預言者によって遺されたもの」がイスラーム地域全体で確認されるか、あるいは流通しているかを理解する糸口となるだけでなく、「遺されたもの」の存在が当該社会をムスリム社会たらしめる要素となりうることを示唆する点で重要だと考えられる。